N. アンダーソン編『アーバニズムと都市化』

Nels Anderson (ed.), *Urbanism and Urbanization*, International Studies in Sociology and Social Anthropology, Vol. II, by K. Ishwaran (ed.), Leiden, E. J. Brill, Netherlands, 1964, ix+178 pp.

現在日本で重大な問題となっている急激な都市化の進展は，先進国はもちろん，開発途上の国々も第2次大戦後にいちじるしく，それぞれ重要な課題を提起している。人口が都市へ集中し近代産業従事者が増大する過程としての都市化と，それらの結果として都市的とみられる特徴的な生活様式であるアーバニズムとは，産業主義の影響下に，本質的に相通ずる面をもちつつも，各国各地域により種々な特色を示している．これら諸問題に関して，都市社会学ないし産業社会学の立場において理論的に，歴史的に，先進国から開発途上の国までを例として実証的に，あるいは都市開発など実践的な面をも研究した12論文をアンダーソン（元ユネスコ社会科学部長）が編集し，イシュラワン（インド，カルナタク大学）が主編者である表記のシリーズの第2巻としたのが本書である。

都市化を歴史的にみれば近代以前には求心的な都市の発展を主軸としたのに対し，工業化とともに遠心的な発展がはじまり，現在ますます外延的に拡大しつつある．一方，古代から認められる都市的な特殊な生活様式であるアーバニズムも，常にダイナミックに進展し，一面地方的であるとともに他面国際的な特徴を示してきている。たとえば，開発途上の国々では産業化の遅れがはなはだしいのに過度の都市化が進んでいることは国際的な問題となりつつある（N. Anderson, アーバニズムと都市化）。都市の盛衰を理論的に抽象するならば，都市の中核そのものとそれを含む社会との関係において結局政治的な権力構造が説明要因となるであろう（Gideon Sjoberg, 都市の盛衰：理論的展望）。

ヨーロッパ諸国では農業発達によって農村は変貌し，都市は人口集積によって郊外化が進展し，都市と農村社会の二分法的な面よりも連続法的な面が強調されることとなり，アーバニズムも都市を遠く離れた農村にまで及んできている（Herbert Kötter, 産業社会における都市農村関係の変化）。とくにアメリカ合衆国では，中産階級の白人がより多く移住した suburbia などの地域を中心として出生力が増大し，大都市人口の増加に移動よりも大きな影響を与えつつある（J. S. Vandiver, アメリカ合衆国の都市化とアーバニズム）。また，スカンヂナビアではヴァイキング時代から発達してきた都市は，第2次大戦後のアグリビジネスの進展により，都市と農村の経済的，文化的な結合がいちじるしく（Börje Hanssen, スカンヂナビアの都市的活動，都市住民とその環境），さらにオーストラリアでは，広大な地域の中で5州の州都を中心とする都市化が大きな特徴となっている（T. Brennan, M. A., オーストラリアにおける都市化のパターン）。

ラテンアメリカの各都市も急速に膨脹しつつあるが，都心近くに比較的高級な住宅，周辺にスラム街といった欧米とは異なる生態的な特徴を示しており（T. Lynn Smith, ラテンアメリカの都市化），もともと都市的な性格をもつ宗教，イスラム教の支配下に発達した都市は商業を根底においた特徴を示している（F. Benet, イスラムの都市化のイディオロギー）。

東南アジアの諸都市は，バンコックはじめ5都市の調査にみるかぎり，農村から'排出'される低所得層の人口の流入により，開発資本の不足は住宅はじめ諸種の困難を増大させ，都市住民の生活は農村のそれと変わらない（J.D.N. Versluys, 東南アジアの都市化）。とくにインドの西ベンガル，ビハール両州に関する調査では，家族やカースト制度に現われたかぎり，都市化と社会的変容における都市農村の二分法，連続法的な概念を区別することは重要な意味をもたなくなっている（Ramkishna Mukherjee, インドの都市化と社会的変容）。なお，エチオピアでも首都をはじめとする急速な都市化に，住民福祉の増進を旨とする技術の意義は重視されるし（Perry A. Fellows, アーバニズム：エチオピアの技術の動向），先進国をも含めて都市化に対処すべき計画や政策における中央政府や地方機関の組織や機能には反省の要がある（W. A. Robson, 官公の都市的プランニングの枠組）。

以上，国際的にも通ずる社会的特徴を示しつつ進展する都市化を真に認識し，人類福祉の増進に貢献するためには，わが国でも関連諸科学の各分野での研究とともに，国際的な視野に立つ multi-disciplinary な共同研究の重要なことを強調しつつ，あえて本書を紹介する。

（上　田　正　夫）